
竹村物語

黒笹八草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竹村物語

【Nコード】

N3350Y

【作者名】

黒笹八草

【あらすじ】

竹村のかぐや姫こと竹村乃子をめぐる物語。

1 さっそくですが…

「ちよつと、そのキミ。」
話しかけられたのが始まりだった。

僕は姫野真輝。“マサテル”じゃなくて、“マキ”と読む。

「かなりの女顔だぜイエーイ！髪のもも長いし。いや、ちゃんと切ってるんだよ？2ヶ月に一度は。でもね、すぐ伸びんだよ、これが。毎月行くわけにもいかないし。ある程度伸びると伸びなくなるし。あと、月の形のアホ毛有るけど、切ると変になるから切らんだけです。決しておしゃれじゃありません！」

……………あれ？

僕、何しゃべってた？

(スタッフ)「かくかくしかじかです。」

「ワワワ〜っ！」

赤面した。するしかないでしょう。

「ごめんなさい。今のは忘れて下さい！絶対に！永遠に！」

首をガクガクガクー

(スタッフ)「……………永眠しそーだよ……………」

「あつ、ごめん！大丈夫？」

(スタッフ)「…ん、まあ……………なんとか。」

「良かった。じゃあ、自己紹介をするよ！えーつと……………性別は男で、年齢は14歳(中2)で、成績は下の上。中の下よりはよく見えるよねっ！まあ、パツとしない、地味な僕です。」

(スタッフ)「…さっきのは？」

「……………。一回、消していい？」

(スタッフ)「あつ、いえ……………ぎゃーー！」

脳内スタッフ消去完了。

「……真輝、何ブツブツ言ってるの？」

「ああ、ごめん。独り言。」

「なんか、めっちゃテンション高かったよ。ツッコミもしてたし。まっ、お前の話はどーでもいいけどさ。」

「よくないときもあるけどねっ！」

「そーだね。それより、あの前の席のかぐや姫。綺麗だよなあ。キュツと結ばれた口、キュルンとした目、パッツンの前髪に切り揃えられたローテイル。ちっちゃな体にセーラー服なのに、あの攻撃性。たまんないよ。」

「……お前、M？」

「Mじゃないよ。でも、あの娘にお金貸してって言われたら、借金してでも貸しちゃうよ。」

「……本当かよ？」

「んー、でも貸したらきつと冷めるだろーね。」

「まあ、そりゃなあ。」

「でもそんなことはないって、絶対。だって、あのかぐや姫の家は世界に名だたる、あの竹村だよ？総資産は少なくとも数十億円。そんな小市民の俺にタカるわけないよ。」

「そりゃそうだ。」

「でも、俺はそんな竹村の財産なんか、欲してない。あの娘がいれば俺は十分なのさ。」

「はーっ……。果たしてそんなことを思ってる人は何人いるかな？」「数百人？」

「わかってるじゃん。同じクラスだから、若干確率上がるけど数百分の1だぞ？」

「いいんだよ、別に。眺めてるだけで幸せだから。」

「……ニヤニヤしてるぞ。あっ、先生来た。じゃあな！」

「おうっ！」

先生の話が始まった。長いんだよなあ。
ため息つきたくなるよ。

「おいっ！姫野！後で前に来い！」

あーあ。

嫌になっちゃうよ。嫌だ。嫌だ。

「姫野！」

「はい。」

「伸ばすな！……お前なあ、いい加減髪を切れ。」

「2ヶ月に一度切ってます。」

「じゃあ、1ヶ月に一度は床屋に行け。」

「家はそんなに裕福じゃありません！」

「だったら、自分で切れ。」

「すごく変になります。」

「別にワシには関係ない。あなたのお母さんにも許可とつたし、
今切るぞ。」

「……本気ですか？」

キラーンと輝くハサミを机の中から取り出す。シャキシャキと

準備運動してから、いきなり……

ジヨキン。

「うわー、先生！髪は女の命というでしょう？」

「あんたは女じゃない。安心しろ。ワシは昔、美容師……」

「美容師？」

「になりたかった。」

「たーすーけーてー！」

「大丈夫だ。キレイにするから。」

「……信用できません。」

その間にも髪はじよきじよき切り落とされ、床に落ちていく。

パサッ、パサッと落ちていく。

掃除は誰がするんだろう？

やっぱり、自分？

「終わったぞ。」

急に声をかけられてビクツとした。

「掃除はしとけ。なかなかこざっぱりしてていい感じだぞ？あと10分あるからな。」

じゃあ。と言って教室から出ていった。

人の髪を学校で切るなボケエ。お前、僕のフサフサの髪がうらやましいんだろう？（担任は、バーコードのハゲ）

心の中で罵っていると、クラスの女子たちが寄って来た。

「大丈夫？」

「うん、まあ……。」

「頭酷いことになってるよ？」

「……やっぱり？」

「うん。ほら。」

女子には必需品（？）の鏡が差し出されるので覗く。

「……………！」

驚きで声も出なかったわい。

「ねっ？すごいでしょ？」

「う、うん……。」

「掃除手伝っよ！」

「…ありがとう。」

「どういたしまして。」

手伝ってくれたのはクラスを牛耳ってる女子の5〜6人。

おかげさまですぐ終わりました。

「本当に、ありがとうな。」

「ううん、大丈夫だよ。」

1 さっそくですが…（後書き）

言い訳タイム。

えっと、私、初投稿でございまして至らぬところも多々あるとは思いますが、できるならば読んでくださるとうれしいです。

以下はこの名の通り言い訳タイムです。暇な人だけ読んでいただければと。

1 この小説は、携帯 パソコン 投稿というルートをたどっている
ので改行が多いです。

……だってブラインドタッチできないんだもん！

2 会話文のカギカッコの前も一字下がっています。

……これからは直します……。

3 誤字脱字結構ありmあす。はい。指摘していただけたら嬉しいで
す。

4 これは、ファンタジーじゃない！そうかもしれない。不明です。
取り敢えず読んでいただきジャンルを教えてくださいただけたらなあと思
います。いえ、これプロローグにしたので多分大丈夫です。

はい。頑張りたいと思います。

2 コーラとメロンソーダを混ぜることは子供のすることだと思えます。(前書)

テスト頑張りたいと思うのですが……はい。頑張ります。

2 コーラとメロンソーダを混ぜることは子供のすることだと思いません。

「貴方、誰ですか？」

まあ、当然の反応でしょう。

「キミを解放しに来た。」

怪しい男はそう答えた。

「……ハア？」

意味がわかりません。

「キミを解放しに来たんだよ。立ち話もなんだから、ちょっと来て。」

「イヤダ。」

絶対に誘拐される！

「ね、おじさん変な人じゃないから。信じてよ。」

……信じられません。

「じゃ、ファミレスはどう？」

「……………」

食欲に誘われる。

グウーキュルルルルー……

「……………」

…恥ずっ！

「なんなら、おじさんが奢ろうか？」

「……………」

腹の虫に脅された男子中学生が一匹。

……考えてなかった。

抜かった。

僕は学校帰りの途中で、ロン毛で、学ランだったことを。

まだ、同伴者が普通の大人ならいい。

案内し終わって、メニューを置くと、

「ご注文が決まりましたら、お手元のベルを押して下さい。」
と言って足早に去っていった。

……関わりなくなかったんだろうね。僕も、もう関わりたくない
けど。

「さあ、何食べたい？おじさんの奢りだから、何でも食べていい
よ。」

ニコニコと気味が悪い。

「……………。じゃあ遠慮はしませんよ？」

「どうぞ、どうぞ。」

10分くらいかけて、メニューを決めた。北海道チーズとクリー
ムのドリアと、エビが入っているサラダと、イチゴのショートケー
キ。

「おじさんは？」

とりあえず、訊ねる。

「もう決まっているから。」
だそうで。

備え付けのベルを押すと、ピンポンという間の抜けた音が夕食時
でないので人のまばらな店内に響く。

ウェイトレス（さつきとちがっておばさん）が来た。

「ご注文は？」

無愛想な声と共に。

「えーと、このドリアと……」

バサバサ（メニューのページのペー지를繰る音）

「……このエビのサラダと……」

バサバサ

「イチゴのショートケーキで。」

パタムッ！

メニューを閉じた。

……おじさんは？と思いおじさんに目を向ける。

おじさんはとっくにウェイトレスに向かっでいて、「ドリンクバー2つと、ハンバーグセット。ご飯で。」

……よくわかるなっ！すげえなっ！

「以上でよろしいでしょうか？」

「はい。」

「では、注文を確認します。北海道のクリ……」

もう心ここに在らずだった。

っーか、なんでここにいるんだらう？

……悲しいや。

涙が出そうになっただけど我慢。

漢に涙は似合わねえっ！

「……大丈夫？」

変なおじさんに心配された。うつむいてたからだ。

「あつ、はい。大丈夫です。」

悲しい気持ちもおさまった。(嘘。蓋をただけ。)

「ドリンクバー、取りに行きなよ。頼んだからさ。」

「……はあ。」

椅子から立ち上がり、ドリンクバーを取りに行く。

だーれも、居なかった。

っーん。迷う。

……こーらにしよう！

コップを取り出して、放出口にセット。そして、ボタンを押す。

ウィーンと鳴いて、ジヨボジヨボと出てくる。

離すと約3秒後に止まる。

それを持ち、あのおじさんが待つ席に戻る。

「あゝ、おじさんのも持って来てくれる？」

ひきつつた笑顔で返事。

コップを置いて、また向かう。

「メロンソーダとコーラの半々のミックスで！」

……キモい色になるよ？

いい大人がジュースを混ぜて飲むなっ！小学生かっ！僕は一度もやっただことがないぞ、コラァ。

と心の中でつぶやきつつ、キモキモミックスジュースを作った。戻る途中、ウエイトレスさん（さっきの）が可愛いそうな子を見る目付きがなんとも言えないくらいイタかった。

……なんで僕はここにいるのかな？

2 コーラとメロソータを混ぜることは子供のすることだと思えます。

(後書

間隔が結構あります。月3回のペースでできたらいいなあ。
ブラインドタッチができるように精進したいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3350y/>

竹村物語

2011年11月21日19時33分発行